

養、則ち一種の別時念仏へと変遷したのではなからうか。但し、「善光寺時供養板碑」に記される結集の名前は、何れも先達らしき男性僧侶、もしくは阿弥号を名乗る在俗出家の禪尼を中心に、それ以外は全て女性の結集である。女性の結集に関しては未だ不明な点も多いが、本碑が重要な役割を持つことは間違いないであろう。

(1) 縣敏夫「善光寺時供養の板碑——埼玉県八潮市医王寺の新資料について」(『野仏』第三一号)。

(2) 伊東宏之「善光寺時供養板碑」について(『寺社と民衆』創刊号)。

(3) 加藤政久「時念仏と齋講との関係」(『日本の石仏』第四九号)。

(4) 中上敬一「時念仏信仰」(『日本の石仏』第六〇号)。

(5) 坂本源一「常陸国南部の大日信仰——大日塚・念仏講衆の研究」、一七五頁参照。

『宝性論』と『仏性論』

——如来蔵の十義における客塵煩惱——

末村 正代

『宝性論』と『仏性論』は、共に如来蔵思想に属する論書である。如来蔵思想とは、衆生に本来的に備わっている自性清浄心を根柢として、一切の衆生に成仏の可能性を認める思想であ

る。そして自性清浄心を強調するあまり、唯識派などと比べて煩惱に関する洞察が浅いと考えられている。しかしこの従来の解釈が、インド中国双方の如来蔵思想に妥当し得るかどうかという問題は、なお検討の余地があるように思われる。果たしてインドで誕生した当初から如来蔵思想は、凡夫にとってより切実で現実的である煩惱よりも自性清浄心を強調する思想だったのだろうか。今回は、如来蔵の十義における煩惱に関する部分の比較を通して、この点を考察したい。

まず、無涅槃性の者についての部分(第四義)である。『宝性論』では「性未離一切客塵煩惱諸垢。」(T31, 831ab)、『仏性論』では「不爲客塵之所染汚。」(T31, 800a)となっている。一乗すら修習していない衆生の性に関して、『宝性論』は客塵煩惱と不離という点に、『仏性論』は客塵煩惱と離れているという点にそれぞれ焦点を当てている。つまり『宝性論』は衆生を「煩惱に纏われている」という現実の側面から、『仏性論』は「仏性を持つ」という側面から見ていることが窺える。二点目は滅諦を説く部分(第五義、『宝性論』では法宝品)における『勝鬘經』の教証である。法身に関する部分は共通しているが、『宝性論』はさらに「如是如来法身不離煩惱藏所纏。名如来藏。」(T31, 824a)と続ける。『勝鬘經』も『宝性論』とほぼ一致している。つまり『勝鬘經』や『宝性論』は法身を説くだけでなく、法身と煩惱が不離である在り方、如来蔵についても言及するが、『仏性論』では法身のみを説く教証となっている。三点目は如理修と如量修を説く部分(第五義、『宝性論』では僧宝品)における『勝鬘經』の教証である。ここでも『勝鬘

『經』は『宝性論』の方に完全に一致し、両者の「然有煩惱有煩惱染心。」(T31, 825a) という部分は『仏性論』には引用されない。自性清浄心は煩惱に染汚されないという点は三者共通だが、なお煩惱と煩惱に染められる心が存在するという衆生の在り方に関する部分は、『勝鬘經』と『宝性論』にしか見られないことから、やはり『仏性論』は煩惱が自性清浄心を染汚できないという点のみを強調していることがわかる。最後は九種煩惱を説く部分(第九義、『宝性論』では無量煩惱所纏品)である。両論書とも直前の部分では九種煩惱のそれぞれについて説き、直後の部分では九種煩惱と四種衆生との対応関係を説くという前後関係は一致している。しかし『宝性論』ではこれらの間に、「有如は無量無邊煩惱纏如来藏故。言無量煩惱纏所纏如来藏。」(T31, 837c) という如来藏に言及する部分が挿入される。『仏性論』には対応箇所がないことから、ここでも『宝性論』の方が、より如来藏に関する記述が厚いと言える。

以上の比較から、『宝性論』は衆生の現実態が客塵煩惱と分離であり、それこそが如来藏であると読み手に再三注意を促しているのに対して、『仏性論』ではその部分が削除され、あくまでも衆生の自性清浄心を強調することに主眼を置いていることがわかる。つまり、インド如来藏思想は客塵煩惱と自性清浄心が同時に存在するという難解な思想であったが、中国に受容される過程でその難解性は取り除かれ、よりシンプルで楽観的な思想へと変容したと考えられる。『仏性論』が中国で造論されたならば、その改作には客塵煩惱に関する部分を省くことにより、衆生の自性清浄心をより強調しようとする意図があつた。

たのではないだろうか。しかし厳密な結論を出すには、『宝性論』梵本も含めた、さらに包括的な比較が必要である。また他の如来藏系文献や中国思想をも含めて考察しなければ、インド如来藏思想と中国如来藏思想の相違の背景は十分には得られないだろう。

徳一『真言宗未決文』〈即身成仏疑〉に

ついて

環 栄 賢

『未決』は、徳一が、空海に対して、率直になげかけた疑問ではあるが、その中でも、〈第三即身成仏疑〉は、即身成仏の問題を、最も深く、教理的・思想的・問題に斬り込んだものとして注目に値すると、末木文美士氏は述べているが、私もそのように思う。又、空海が反論した『秘密曼荼羅教付法伝』の文章も、真言宗の中でも、即身成仏思想の発展を考える上で非常に注目すべきものである。

初期の空海と徳一との交流を知るには、弘仁六年(八一五年)三月二十六日と有る書状や、弘仁六年四月五日の書状が有る。

弘仁六年四月五日の書状には、陸州の徳一宛とあるから、当時、徳一は会津ではなく常陸にいた事がわかり、非常に丁寧に礼をつくして、徳一に協力を求めていることがわかる。又、『性霊集』巻の九に、いわゆる『勸縁疏』と呼ばれている